

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2013-05-20

# APM news 082

## 秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)

第18回美術館大学 4月20日(土) pm3:00~4:30/受講者:73名/講師:高田清太郎、秋山孝

「秋山孝が選んだ30の金言・  
高田清太郎の建築デザイン哲学について」



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8  
TEL 0258-39-1233



18回目の美術館大学は第12回企画展に合わせて「『秋山孝が選んだ30の金言・高田清太郎の建築デザイン哲学』について」というテーマで行われた。長岡市榎田屋に居を構える高田建築事務所の代表取締役・高田清太郎氏の展覧会である。秋山館長は、以前より地元の人を取り上げる展覧会をしたいと考えていた。そしてその第一弾は秋山孝ポスター美術館長岡のサポーターズ倶楽部会長を務めている高田氏にしたいとも考えていた。展覧会を企画するに当たって秋山館長は、高田氏の著作物のひとつであるブログから心に響いた言葉を選び出し、それを「金言」とした。そしてそれに対応する図像を、図面、建築写真、立体模型などといった高田氏の作品の中から、高田氏と秋山館長の二人で選び出し、金言と図像とをポスターに仕上げた。この、「選ぶ」という作業がとても重要で、かつ非常に難しいのだという。いくつもの候補の中から本質を見極め、それ以外のものを削ぎ落としていくことが大切で、それによって作品が最大限にシンプルになり、伝えたいことがダイレクトに伝わるのである。

高田氏と秋山館長の対談は、約半数もの金言に及んだが、中でも金言20の「何気ない一言が人を動かす。私を動かす。」は、秋山孝ポスター美術館長岡(APM)の蔵についての言葉であったこともあり、熱を感じた。APMには現在建設中の蔵(収蔵庫)がある。このときに秋山館長が高田氏に依頼したのは、高田氏の得意とする「構造」を全面に出してほしいということであった。APMはフレンチトラスという鉄骨作りの屋根が使われているが、蔵の屋根は断面を見るとMの文字に見えるため、「M字構法」と名づけた。Mは宮内のM、であり、ミュージアムのMでもある。引っ張る力と圧縮する力がバランスよく屋根を支える構造であるという。そこには力の流れが存在する。空間の流れと心の流れ。この流れが大切なのだそう。

質疑応答では長岡造形大学の山下教授より質問をいただいた。アメリカの建築家のフィリップ・ジョンソンは「クライアントはいない方がいい」という言葉を残しているが、高田氏はこの言葉に対してどう思われるか、という内容であった。これに対し高田氏は、「クライアントがいないと設計できない」と答えた。クライアントとコミュニケーションする中で、そのクライアントの望むもの、望む暮らしが見えてくる。そもそも巢舞(=住まい)づくりの設計とは、すま「居方(いかた)」そのものなのであるから巢舞人、つまり住人こそが設計者であるというのが高田氏の答えであった。また、高田氏はご自分のことを建築家でなく建築屋であると自称している。芸術としての建築物でなく、あくまでもひとりひとりが主人公になれる「巢舞」を造って行くのだという気概を、その言葉に感じた。(APM公式ホームページより抜粋)